

## まとめに代えて

### 育児スタイルに合った情報網をもつ母親たち

母親たちの育児の関心事は、子どもの「ほめ方・しかり方」と「友人とのつきあい」が上位にあげられており、「子どもをしかってばかりで、ほめられない育児」に対する自責の念が繰り返し述べられていた。育児書や雑誌から得た「ほめる育児」の呪縛からか、子どもをしかることが性格形成や友だちづきあいにまで影響を及ぼすことを心配していた。

また、母親自身の友人づきあひも、育児を中心とした近所の友人や子どもの母親であることが多いため、親子での対人関係の悩みが随所で目立った。母親たちは、このような育児環境の中で、いくつかの育児や教育の人から人への情報ネットワークを形成していた。

まず、①実家の母親を中心とした姉妹や叔母などの「母系親族網」、②近所の友人を信頼情報源として広がる「地域密着友人網」、また、③夫を核として、実家の母、近所の友人や姑などが加わる「家庭中心網」、さらに、④近所ではない友人や職場での先輩、園や学校、習い事の先生など専門家、宗教や生活感覚に合った所属グループでの「専門家志向網」である。本調査では、母親たちの関心事の内容や子どもの学年などに応じて、各自の育児スタイルに合わせた特定の情報網を形成している実態が浮かび上がった。

### 自分さがしを感覚の合う複数のグループで

近年、都市近郊では、幼児に習い事を始めさせるきっかけとして、親子での「友だちさがし」が重要視されている。本調査の中でも、「自分が育った故郷のように、近くに子どもを安心して遊ばせる場所がない」、あるいは、「近くには子どもと同年齢の子や気の合う親子がいない」といった自由記述がみられた。こうしたことが要因となって一種の「文化的な公園サロン」を求めて、習い事や教室

に通う親子が増えていることが明らかになった。

また、「信頼する教育情報源」や「子育ての参考にしたい人」として、「子どもの習い事で知り合った友人」もあげられていた。

本調査の回答者の中心年齢である30代の母親たちは、60年代後半から70年代に幼児期を過ごし、従来の習字やそろばん、ピアノに加えて、幼児向けの音楽教室、家庭でできる通信教育、プリント教材などの習い事が一般化して定着した環境下で育った。

母親たちは子どもに習い事をさせる理由として、「親子で楽しみたい、友だちに出会いたい」と、親子での友だちづきあひを共通してあげていた。つまり、現在、園児や小学校低学年の母親たちの多くは、幼少時に自分自身も習い事を体験し、子どもが乳幼児時代からスイミングや児童館の親子サークルへ通ったり、親子で自分たちの教育感覚に合うグループや居場所、専門情報を求めて、親子外出型の育児を経験してきた世代である。

今回の調査では、母親の就業状況や子どもの学年、性差、出生順位で回答に差異が認められた。しかしながら、その一方では、働く母親は子育てと仕事の両立を悩み、専業主婦も育児と自分の生きがいや求職の狭間で揺れている側面が明らかになった。

母親たちは、育児不安や悩みを、自分独自の人間関係の情報網を作り、その中で解消しようとしていた。具体的には、地域活動や趣味のサークル、職場で出会う人たちとの交流であり、その中で、自分らしさを発揮したり、自分さがしを続けることで活躍の場と充足感を得ようとしているように見えた。

今後はこれらの実情を踏まえながら、母親への育児支援の質や方法をさらに考察する必要があると思われる。(山岡テイ)